

浄土

1986-5

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 (運輸省 特別扱承認雑誌) 第三二五号
昭和六十一年四月二十五日印刷 昭和六十一年五月一日発行

第五十二卷

五月号





五月の秀句

初夏や蝶に眼やれば近き山

原 石鼎

船の上に揺るる大空五月ならん

香西 照雄

窓の景人夏めきて歩くかな

星野 立子



此の観を作す者は、身を他世に捨てて、諸仏のみ前に生じて、無生忍を得む。

——『観無量寿経』真身観文

目次

法話

法爾自然……………藤原円忠……(2)

《エッセイ》

ルンルン……………合島近……(7)

＜連載＞ 一紙小消息 ⑩

深く信ずる心……………村瀬秀雄……(11)

み仏とともに =14=

——会者定離——……………安居香山……(18)

寄稿

心の時代へ願う……………北山良祐……(23)

◇◇◇一田牛畝先生の冥福を祈る◇◇◇……………(27)

河西回廊の秋

「五大石窟の旅」旅日記(十)……………木下隆一……(29)

◇◇長篇連載小説◇◇

立ち止まるな善導 第23回

女の戦争

……………寺内大吉……(35)

挿絵 松濤達文

表紙絵「花菖蒲」 松浦春子画

法
爾
自
然



昨年末から住居を改築の為仮住まいのせいもあってか、冬から春にかけて寒い日や雨雪の日ばかりが多いように思えて気分が重かったが、さすがに五月に入って気分は爽やかである。

五月特有の風といっしょに光も翔け抜けて行く感じがする。小鳥達も入梅の子育て時期

を前に、パートナーを求め、愛の巢作りに盛んに飛び交い、声を張り上げてさえずりに暇が無い。

輝きを増した空を見ていると、いづかの波と雲の波、と歌った小学唱歌を思い出す。家々の屋根の瓦が波のようにキラキラと光り、青い空に白さを取り戻した雲が波のようにゆれて

藤 ふじ
原 わら
円 えん
忠 ちゅう

(市原市無量寺住職)

流れ、その天地の間を鯉鱗が泳ぐ誠に好時節だが、物憂さとけだるさが同居している。五月の光りには目に見えない不思議な翳^{かげ}りが匿^{かく}されているようでもある。

今年四月に希望と不安をもって就職した新入社員や、希望に胸ふくらませて新らしい学校へ入学した新入学生が、周囲の変化に自分を転入し切れないために軽いノイローゼにかかる「五月病」という言葉もあるが、多少はこの時期特有の物憂さにも関係があるのだろうか。とに角、新入社員・新入学生は古い習慣の安定感をふり返るより、新らしい習慣に慣れる為に積極的にアタックする事が大事だろう。

心身の健康を大いに注意するのは新入社員や新入学生に限らず、生きている者すべての課題でもある。

古い時代「人生わずか五十年」と言われていたようだが、五十年寿命の時代には「自分が育ち、自分が学び、自分が働きながら子孫

を育てる」ことで、子孫を育て終れば急激に体力が衰えて一生を終るという在り方が一般的であったようだ。

下天というところの天人の一昼夜が人間世界の丁度五十年に当たると言われているから、天人の一昼夜のうちに子孫を育て終って一生を終るというパターンだった。

しかし、現在では、天人の一昼夜と一昼くらいが人々の平均寿命となってきた。社会の安定がもたらした医療の改善普及や栄養の改善や住の改善や教育の普及や過酷な労働の減少等が大きく作用したものと思われるが、子育てが終った後に未だ相当期間その人の人生が残されることになった。

仮に、生まれてから成長して経験を積んで一人前の社会人となる迄を二十五年とすると、以前は次の二十五年が子育てと社会活動の期間だった。現在は此の後の二十五年が子育て抜きで社会活動の期間と見なされている。この五十歳以後の二十五年以上を生きる

と言う事は、昔は数的に非常に少なかったの
で、[〃]どう生きるべきか[〃]というメーターの
積み上げが無いという。だから社会全体の重
大事である。

どう生きるべきか、これはあらゆる分野か
ら[〃]こう在れば幸せだ[〃]というデーターを積
み上げて行くべきだろうが、以前公務員の共
済組合の会報誌に次のようなことが載ってい
たが、これは一生を通じての一つの参考にな
ろうと思う。それは、その組合の認定医さん
の「自然の法則に従え」という文で、内容は
あまり巧まない自然的な生き方をすすめられ
ているものであったが、先哲の言葉をいくつ
か示されていて自説を押し付けるよりも相手
に考えさせるようなところがかえって印象深
かった。

先ず中学の先生から転職して日本石油に入
りや、がて社長会長と歩まれた方が自分の経
験から作られたという座右の銘、

欲多則弥貧 欲寡則却富 人生凡如是
不焦前不怠 法爾度流年

を示し、次に、ゲーテの、

星辰のように

急がず

しかし休まず

人はみな

おのが負い目のまわりを回れ

という詩を掲げてあった。

そして、江戸時代の有名な蘭医学者杉田玄
白の晩年の言葉として、

医事不如自然

と言う言葉を挙げ、次に、西洋医学の祖と仰
がれるというヒッポクラテスと言う人の、

自然が治し、医者は助ける

という言葉をあげ、最後に孟子の言葉として、

天に順^{したが}う者は存し、天に逆らう者は亡ぶ
(天とは、天然自然のうちに感ずる法則、神
仏の摂理という意味だろう)

という言葉を提示しておられた。

これらの言葉は、それぞれの時代の先端を行き今なお多くの人々から尊敬されている方々の言葉として一段と重みを感じるが、共通している事は、人間の力を超えたところにある法理法則のようなものの尊厳に気付いていて、自分の努力が此の法理法則に背かないように在ろうとする態度がうかがえるように思う。

別の言葉では「法爾自然」と示された言葉と脈絡を通じるものであろう。この法爾自然という文字は、戦後私の町に建てられた公民

館に掲げられていたのを記憶しているが、その当時の事を思い返してみると、今次大戦に敗れた直後の日本は、人々は心の抛りどころを失ない、生きるためのルールは崩壊して人心は荒廃を極め、人間社会という共同体意識は忘れられ、一人一人が勝手に生きるために動き廻るという感じであった。

そんな状況の中から、みんなの抛り所を作ろう、みんなの集まれる場所を作ろう、みんなの話し合えるそして心を通い合やすことの出来る場を作ろう、という動きが公民館活動として表われ、その流れに乗って私の町では町民総出の労力奉仕で他地区に先がけて二階建ての立派な公民館が建てられ、その二階の部屋に「法爾自然」と大書された額が掲げられていた。今考えると、混乱の世相の中にあっても、頼れるものは何もないような世の中であっても、人間の知恵を超えたところに存在する大いなる自然の法則のようなものを心に求めながら、国土や人心の回復に邁進しよ

うという願望がそこに表わされていたのかも知れない。

「法爾自然」、初めて此の額に接した頃はこの文字の包含する意味の深さ等思いも及ばなかったが、経年漸くに少しづつ味わいの深さを感じる昨今である。

目先の現象にとらわれた心が、行きづまって困ったら「法爾自然」という言葉をふり返って見ようと思う。

自我にとらわれた心が迷い出したら、「法爾自然」と口ずさんでみようと思う。

浄土宗の宗祖法然上人は、修業中の青年時代に、師僧から「あなたは法爾自然な人である」と言われて法然と言う名前を授けられたという。

人間の知恵を超えた何かを若い頃から内蔵されていたのであろう、それだからこそ、周囲から「知恵第一の法然房」とほめそやされても毫も慢心することなく、ひたすら勉学修行に励む直摯な日々を送られたのだらうと思

うし、人間の知恵の限界を見通されていたからこそ、周囲から「知恵第一」とおだてられても「私は知恵など勝れていない、阿弥陀仏の慈悲におすがりしようとしている一介の修行者だ」という一生を過されたのだと思う。

普通の修行僧と同じレベルならば、あれも知ってる、これはこうだ、これも出来る、と自分を主張するところだろうが、法然上人は「知恵など勝れていない、愚かな法然房だ」とご自分で仰せられているのは、人間の知恵を超える大いなるものが見えて居られたからこそだろう。

私には人間の知恵を超えたところに存在する神聖不変の働きを見通すことは出来ないが、星辰のように急がず、しかし休まず、我がつとめを果すようにしたい、余の事は阿弥陀仏のおはからいにお任せの心境でありたいと思う。

《エッセイ》

ルンルン



本誌のような雑誌に、ルンルンなどという言葉を使うのは相当気がひける。それでも敢えて使わせてもらうのは、ルンルンと言いたくなるほど、いまの私が、うれしさと感謝の気持ちでいっぱい、またこの気持ちを表現するのに、まことに適切な語句だからである。

ほんのひと月ほど前、私の幸福感はガシャンとなった。そして十日間後に救われた。その後も、まわりに見える状態は、決して幸福とは言えない筈なのに、私自身は、以前にも増す幸せ感、つまりルンルン気分浸っている。

合ごう島じま
近ちかし

(団体役員)

るのである。

そしてこのドン底の間、自分のいやらしさ、弱さ、あさはかさ等を嫌というほど自覚させられた。とてもとても、えらそうなことなど言えたものではない。

この十数年、実に幸せな日々が続いた。調子に乗って「世界一の幸せ者だ」と吹聴したくらいである。これはなにも経済的に恵まれたとか、社会的に高評価を得たとかいうものではない。家族みんなが健康で、なんとか食えるし、仕事も遊びも、そして家庭生活も実

に楽しいからである。

もともと九州の田舎っぺ。典型的な昭和ひと桁族で、法律に明るいわけぢゃなし、メカには弱く、横文字はからっきしという人間が、この大都会で生活できること、これだけでもありがたい話。まして上京直後、胸患の前科があるとかで、せっかくつかんだ役所の席を棒にふった時のことを思えば、もう御の字である。これはひとえに、すばらしい先輩、友人に恵まれたからで、まったく感謝感謝だ。

遊びは、碁もゴルフもカラオケも、あるいはソフトボールもボーリングも、みずから天才をもって認じ(客観的評価はまったく別)、気の合う仲間と思い切り楽しむ。

仕事も遊びも楽しいが、私の幸せ感の大きな要素は、やはり家庭である。二人の娘は、それぞれ大学と専門学校へ進み、オヤジに向って「チビ」とぬかすまでに成長した。頭も容姿も、決して恵まれてなく、気のせいかな、よそ様の子よりひ弱さを感じるが、思いやり

みたいなものを持っているように思う。むろん、親子断絶など、わが家では考えられない。

で、「もし不幸感を持つとすれば、どのようなときか」ときかれると、「家族、特に子供が病気をしたとき」と、答えはいつもはつきりしていた。ところが、その「とき」に今日遭遇したのである。

三月の初め、上の娘が、「ジンマシンが痒いよ」と騒ぎ出した。数日前から具合が悪いとは思ってはいしたが、風邪か疲れぐらいに考えていた。見れば、いかにも痒そうなブツブツが、ほとんど全身に出ている。

「こりゃいかん、肝臓機能がゼロになっている。早く医者へ行け、おそろくすぐに入院だろう。しばらく点滴すれば治るよ」

私も、かつてひどいジンマシンに悩み、約一カ月の入院で、すっかり体が洗われたようになった経験がある。案の定、娘も直ちに入院ということになった。可哀想だが、無茶をした報いともとれる。しばらく静養するのも

よからう。

思えば、私が入院したのは、上の娘が生れてまもなくだった。ということは、この娘が出来たとき、父親の身体が万全でなかったおそれがある。そう思うと、申しわけなくて、娘にことわらずにいらなかった。「そんなことまで気にすることないよ」と娘は許してくれたが、やはり気になる。

ところが、心配はそれどころではなかった。担当の医者が「話がある」というので訪ねたが、しきりに首をひねって、あまりしゃべらない。若い医者だから、私の体験談を、できるだけたくさん話した方が参考になるかと努めてみたが、どうも反応が違う。

「問題はジンマシンではない」という。首筋にふくらみがあつて、これがあやしいのだそうだ。「単なる炎症かも知れないが、悪性のおそれがないともいえないので、ようすをみて、場合によっては、首筋を切って調べることになるかも知れない」「悪性と言いますと

？」「腫瘍、つまりガンですね」

ショックである。思いもよらなかった。だいたい私は遺伝説を採るほうで、私の場合、肺疾患や心臓病、ないしは脳隘血なら納得しなくもないが、糖尿病やガンなどというものは、てんで縁なきものと独断していた。ショックではあったが、医者立場として、万が一の場合のこととも言っておく必要であるのだらう、と自分を慰めていた。

ところが、二日ほどして、やはり切るということになったのである。親としての承諾印を押す書類はドイツ語で書かれ、「日本語では嫌だろうから」と言われた。グアーン。

「あんなにピンピンしていて、そんなことがあるんですか？」

「ええ、例はいくらもありますよ」

「疑いがあるということ、可能性は低いんでしょう」

「五分五分としか言いようがありません」

「……」

娘の所へ、看護婦さんが、ハサミと剃刀を持ってきた。髪の一部を切り、剃刀を当てて、手術に備えるためである。すこぶる愛想がいい。娘も冗談で応えているが、私はたまらない。

家族と顔を合わすのがこわい。女房も下の娘も、深刻さがわからないから、それぞれ勝手に振舞う。不憫でしかたがないから、なるべく足繁く行くことにしていたら、見舞いに来てくれた娘の友人がよけいなことを言ってくれる。

「オヤジどのがよオ、バカに品行方正になって、ちょいちょい来るようだとヤバいんだぜ」むろん若者同士のたわむれだが、私は気になる。で、わざと物を忘れたり、用事をつくったりして、女房や下の娘を、できるだけ通わせることにした。

もし本当に悪性だったらどうしよう。発達した医学に期待するのはもちろんだが、覚悟はしなければならぬ。娘も馬鹿じゃないか

ら、いずれ勘付くに違いない。そしたら……。交通事故など不慮の災害は、たしかに気の毒だが、じわじわと追い込まれるより、まだましな気がする。

大宇宙の中にあつては、人間の一生がいかにか微細なもので、五十年生きようが百年生きようが、あるいは二十年しか生きられなかるうが、大した違いはないという悟りが、娘ともども得られようか……。いや、どうしても悟らなければならぬ、そんなことも考える。

それに長生きはするもんだと、ただ漠然と考えていたが、こうなると話は別だ。うちの娘たちは、私の居ない所へ行ったら途方にくれるに違いない。絶対に私が先に行つていてやらねばと真剣に思う。

私はK先輩を訪ねた。一人でじっとしているのがたまらなかったからである。K先輩は、諄諄と論してくれた。

「そりや君、心配だろうが、まだ悪いときま

ったわけぢゃないし、君がしつかりしなきゃだめだよ。家族には言うな。女は気持ちを押えられなくて困るからね。そう、一度入院させたんだから病院は変えんほうがいいよ。医者が若いと言ったって、病院だから、なにもその医者だけでやるわけぢゃないだろうから。こうなったら、検査の結果を祈るしかないよ。そりゃ医者立場としては五分五分としか答えられんだろう。僕だって、二度ほど医者におどかされたことがあったよ。案外、なんでもない、ということになるんじゃないか」

私のいやらしいところで、あらぬことまで口走ってしまったらしい。

そうだ、祈るしかないのだ。こんなときに限って、と神様にお叱りを受けてもかまわない。ひたすら祈るしかないのだ。

検査の結果が出る三日ほど前、一つの情報もたらされた。どうやら伝染性の肝臓病らしい、というのである。症状からの説明が一一々納得がゆく。だいたい安心した。

そして、いよいよ検査の結果。担当の医師が明るい表情で病室に入ってきた。それでもあたりをはばかりようすなので、一瞬びくつとしたが、すぐに快報を伝えてくれた。ヨカッター。若い先生が神様にみえた。ホットした表情に一生懸命だったことがありあり、ありがとう。

さらに長期の入院、それに下の娘にも伝染したらしい、結構金もかかる。というようなことで、普段の状態からすると難事といえるが、私にとってはルンルンなのである。

娘も、こんどばかりはこたえたらしい。「動物でも植物でも、エサや肥料でどうにでもなる」という忠告を、こんどは素直にきいてくれるかも知れない。厄払いや墓参りも、進んでする気になっている。

こんどのショックで、自分のいたるなさや幸せの要素も、改めてわかった。これを機会に、自分をよく見つめ直し、より充実した人生のコヤシにしたいものである。

深く信ずる心

村瀬 秀雄
むらせ ひでお



「本願に乗ずる事は信心の深きによるべし」

この身を本願に任せて、仏助け給えと念仏を唱えていれば、本願力に乗じて極楽往生ができる。そのためには本願を疑わずに深く信ずる心がなくてはならない。深く信ずる心というのは三心のうちの深心のことであり、信じて疑わない信心のことである。法然上人は次のように説いた。

「深心というのは信心である。わが身は罪惡を犯しながら生死の世界に迷っている凡夫であることを信じ、阿弥陀仏はどのような凡夫でも必ず来迎して極楽浄土に導き給うことを信じて少しも疑わないのである。仏は念仏を唱えていた者が往生できないことがあれば仏にならぬと誓い給い、今までに仏になり給うているのである。念仏を唱えていれば必ず往生できると信じていれば、自然に深心が具わ

るのである」(念仏往生義)

三心は念仏を唱える時の心の持ち方であつて至誠心、深心、廻向発願心の三つであり、そのうちの一心でも欠けた者は往生できないとして、善導大師は次のように説いた。

「観無量寿經に三心を具えた者は必ず極樂往生することができると説いているはこの經文の意味は、三心のうちの一心でも欠いた者は往生できないということである。このことをよく承知していなければならない」(往生礼讃偈)

大師がこのように説いたことの一つの意味は念仏往生の本願は三心を具足して念仏を唱えるのであるから、その一つが欠けても往生できないとするのである。經文には本願を次のように説く。

「もしわれ仏をえたらんに、十方の衆生が至心(至誠心)に信樂(深心)し、わが國に生ぜんと欲し(廻向発願心)、乃至十念せんに、もし生ぜずんば正覺をとらじ」(無量寿經)

もう一つの意味は、三心は別々に三つの心として説かれているが、実は一つの心であつて、その一つを欠けば他の二つの心は意味をなさないということである。法然上人は次のように説いた。

「三心ということを一言でいえば、往生したいと願う心一つになる。往生を願う心に偽りがなく、心から往生したいと願って念仏を唱えれば、自然に三心が具足される」(法性寺信実の伯母なる女房に遺わす御返事)

三心は一つ心であるが、中でも大切な心として中心になるのは深心である。上人は次のようにいった。

「三心は一つ一つに分れているといつても、肝要という点からいえば深心であるから、他の二つの心は結局のところ深心に含まれることになる」(三部經釈)

深心とはどのような心の持ち方であるのかについて、善導大師は次のように説いた。

「深心は深く信ずる心である。何を深く信ず

るのかといえ、第一に己れを自覚して罪業の多い身であることを深く信ずるのである。

この身は罪業を積み重ね、迷妄の世界に沈んで流浪を続けていながら、いまだに迷いの世界を抜け出すための教法に会わなかったことを反省し自覚するのである。第二に罪深い凡夫にとっては阿弥陀仏の慈悲を仰いで極楽浄土に往生することを願う教えによるのでなければ、悟りを開く道が全くないことを深く信ずるのである。無量寿経には阿弥陀仏が四十八願を成就し給い、念仏を唱える者は一人も洩らさずに往生させると説いてゐる。仏の慈悲に対して少しの疑念を挟まず、思慮をめぐらすことなく深く信じて念仏を唱えれば、罪業のあるなしに拘らず誰でも本願力に乗じて必ず往生できると教えている。釈尊は観経を説いて三称、九品、定善の各法門を明かし給い、極楽の功德を讃歎し、人々に心から極楽浄土を慕う心を起させた。阿弥陀経には十方の仏たちが口を揃えて念仏往生の法門は真実

であることを証言し、この法門によって修行するようにと勧め給えている。人々はただ仏の慈悲を仰ぎ、身命を惜しまずに仏の言葉を信じ、教えに従って常に念仏を唱えなければならぬ。こうすることが仏の教えに随順することであり、仏の本願に随順することである。こうして仏に随順する者をこそ真の仏弟子というべきである。行者が経法を深く信じ、教えを實踐すれば必ず極楽往生できるし、他をも往生させることができる」(観経散善義)

仏の教えを比く信じている者ならば、いかなる者が現われて念仏往生の教えを非難することがあっても驚かず、ますます己れの信心を増長させなくてはならない。大師は続いて次のように説いた。

「信仰と修業を異にする人が来り、経論の説を盾にして念仏往生の法門を非難し、凡夫は往生できないと論証したにしても、己れの信仰を固めて怯むことなく、己れの信心を破ら

れてはならぬ。その人が引用する経論もまた勝れた教法であらうから信じないわけではない。同じく仏説である以上は同じく尊重し、信仰しないわけでない。ただその人が引用する經典は釈尊が説き給うた場所が異なり、時節が違い、説法する相手が同じでないから、教えによって受ける利益に相違があるのである。釈尊がその経法を説き給うた時は、觀經や阿彌陀經を説き給うた時ではない。釈尊は常に聞く相手の素質と才能に適した教法を説き給うのであるから、時と場所を異にして説かれた經典は、適応する人もまた違うのである。その人が引用する經典は菩薩か聖者に適した信仰と修行であらうけれども、釈尊が觀經に定散二善を説き給うた時の相手は凡夫の韋提布夫人であつたし、釈尊滅後の穢れきつた惡世で苦惱する凡夫のために誰でも極樂往生できる法門を明かし給うたのである。末世の凡夫が仏の慈悲を信じ、觀經によって信心を固め、心底から喜んで念仏を唱えるのも、

觀經が凡夫のために説かれた經典であるからである。たとえ信仰を異にする人々が百万千万人集まり来りて、凡夫が往生できる道理がないと論証したにしても、阿彌陀仏の慈悲を信じて往生を願う者は己れの信仰をますます増大して確固たるものとなし、少しでも信心を退くことがないのである」(同上)

法然上人はこのように説く大師の言葉を引用してから、次のように説いた。

「深心とは深く信ずる心のことである。この世の生活は疑心暗鬼の中で暮しているが極樂淨土に往生するためには、疑わずに信ずる心が大切である。何を信ずるかといえは初めに己れの實態を見極めて、念仏往生の法門の外にはそれが救われる道がない凡夫であること、深く信づるのである。次には阿彌陀仏がすべての凡夫を救い給う慈悲を深く信ずるのである。この信機と信法との二種の信心を固くもつことによって初めて極樂往生ができる。また大師は一の別解、別行、異学、異見等

によつて信心を動揺させたり、退失すること
があつてはならぬと説いている。大師がいう
これらの諸説と修行は聖道門のことであり、
浄土門以外の人々が説く學問と見解であり、
諸行の修行のことである」(選択集)

善導大師は己れの凡俗さを信ずる信機と、
本願を信ずる信法とによつて深心と解釈した
が、上人はこの解釈こそ大師の慈悲であると
して、次のように説いた。

「善導大師は未來の人々が妄念を起さず、罪
をつくらずに念仏を唱えなければ往生できな
いのであるまいかという疑いを持つことを慮
つて二種の信心をあげたのである。われ等ご
ときは煩惱を断ずることができないし、罪業
をつくつてゐる凡夫であるが、このような者
でも阿弥陀仏の本願を深く信じて念仏を唱え
れば、十声一声の念仏しか唱えなかつた者に
至るまでが必ず往生できると説き給うたので
ある。もし大師がこのように説き給わなかつ
たならば、われ等凡夫は恐らく往生できない

と思つたであらう。このように考えるにつけ
ても、大師が説き給うたことが心に染んで有
難く思ふのである」(往生大要抄)

禅勝房が上人に問うていった。

「戒律を守つてゐる者が数少く念仏を唱える
のと、破戒の者が数多く念仏を唱えるのとで
は、どちらが九品の上住に往生できるでしよ
うか」

すると上人は坐つてゐた畳の表を指さしな
がら答えた。

「ここに畳が敷かれてゐるから、破れてゐる
とか破れてゐないとかを論ずることになる。
もし畳がなければ、どうして破れてゐるとか
破れてゐないとかが問題になるであらうか。
それと同じように末法ら世の中には持戒もな
ければ、破戒もないのである。あるものは無
戒の名ばかりの出家者である。伝教大師は末
法燈明記の中で無戒の出家者も世宝であると
説いてゐる。今時に持戒破戒の是非を論じて
も仕方のないことである。このような末法の

凡夫を救うために阿弥陀仏がおこし給うたのが念仏往生の本願であるから、ただ急ぎに急いで念仏を唱えなければならぬ」(勅修御伝 第四十五)

禅勝房は本願を深く信じて、念仏を唱えれば極楽往生できるという信心を固めていた。やがて故郷の遠江の国(静岡県)に帰ることになった。上人に暇をつげる挨拶をするために訪れると、上人は京土産にするようにといひながら、次のようにいった。

「聖道門の修行は知恵をきわめて生死の迷いから離れ、浄土門の修行は己れの愚かさに立ちかえって念仏を唱え、極楽浄土に往生することであると心得るのがよい」(同上)

嘉禄の法難(一二二七)で流罪となった多念義の隆寛が旅を重ねていた時に禅勝房に会って旧交をあたためた。その時禅勝房は見送ってくれた隆寛の弟子たちにいった。

「各々方は念仏を唱えるのに、口癖のようにして常に唱えてもらいたい。そして極楽

往生をとげて下さい」(同上)

また禅勝房は次のようにいつていた。

「浄土宗の教えを学ぶには、つまり極楽浄土に往生するのはたやすい事であると心得るまでが大切なのである。たやすいと心得れば、たしかにたやすい事なのである。ところが近頃の学僧の議論にいろいろな説があつて、さまざまに分れている。仏の教えは深遠であるから、その邪正を弁えることは難しい。ただし先師上人が仰せられていたことの中には決して難しい議論を口にすることがなかった」(同上)

念仏を唱えれば凡夫であつても必ず極楽往生できるし信じている者は往生できるし、少しでも本願を疑う心がある者は念仏を唱えても往生できない。上人は常にいつていた。

「必ず極楽往生ができる」と信じて念仏を唱えている者は往生できる。往生できるかどうか判らないと思ひながら念仏を唱えている者は往生できない」(常に仰られける御詞)(つづく)

み 仏 と と も に

=14=

— 会 者 定 離 —



やす い こう さん
安 居 香 山

(大正大学教授・文博)

戦後私は沼津に帰り、師籍も終戦後の混乱期に生きていた。しかし、勉強をもう少ししたいという意欲にかられ、大正大学の研究科に席を置き、副手にしてもらった。

当時、中国哲文学科の主任は、山口察常先生で、群馬から上京されて、教授をされていた。上京の折は、本郷の願行寺で「易経」を講議しておられ、私もその講席に連なったこともあった。暗い燈下のもとでの講議であった。食べるものもない時代で、すいとんなどが常食であった。その頃、東京文理科大学の竹田復教授が講師として大正大学に来ておられた。戦前から来ておられ、私もその授業を受けたことがある。その竹田先生が、山口先生を通じて、

「勉強がてら、文理科大学の副手にこないか」

と私におさそいがあった。当時、文理科大学では、まだ学生や研究員が復員してきておらず、食糧難もあって副手のなり手がなかった。よい機会と山口先生からもすすめられ、国立大学の副手として採用して頂いた。昭和二十一年の六月のことであった。

今日、まがりなりにも学者として働かせて頂けるのも、山口先生や竹田先生のお導きがあつてのことであつた。山口先生はその後、何年かしてお亡くなりになつたのであるが、竹田先生は今尚ご健在で、九十余才の御高齢である。そして、私が専門としている「緯書」の研究をするようにすすめて頂いたのも、竹田先生であつた。

私はこの後、十七年間、この大学にご厄介になるわけであるが、その間、文理科大学は東京教育大学となり、そして今やこれもなく、筑波大学となつてしまつてゐる。有為転変の世の中を、まさまじと見る思いである。その間、私は副手から助手となり、月給も頂き、勉強もさせて頂いた。いまは年々、恩給まで頂いてゐる。私が大正大学に帰つたのが、昭和三十七年で、その間、国立大学の御厄介になり、いろいろとその実態を見せて頂いたわけである。

まだ終戦も日の浅い或る日、丁度その日は文理科大学の入学試験の日であつたが、思いがけぬ人にめぐり会つた。それは内田隊長で、私が福知山の終りごろに御厄介になつた第二中隊長で、当時大尉であつた。

「隊長、何しに來られたんですか」

「いや、文理科大学を受けにきたんだ。君何してゐるんだ」

「ここの副手をしています」

「いやあ、驚いたなあ。何とか頼むよ」

「官立大学で、私はただの副手です。まあ頑張つて下さい」

こんなやりとりをして、とも角喫茶店にご案内した。

喫茶店といつても、その頃は碌な飲みものもなく、大豆コーヒーみたいなものであつた。内田隊長は士官学校出であつたので、戦後、旧制大学を受ける資格があつたわけである。結局、隊長は受からなかったらしく、その再会はこれでおしまひであつた。

その時、隊長は、

「おい、奥さんは元気かね」

と尋ねられた。私はまだ結婚していなかつたので、その旨伝えると、

「それではミス福知山は、誰と結婚したのかな。君と結婚したとばかり思っていたが」

と、不思議そうに、首をかしげていた。私達が福知山にいた頃、営内居住で、外には遊びに出ても、起居は営内であった。その頃、昼間は、街のお嬢さん方が、五十人程隊に勤めておられた。隊長の秘書や、将校集会所の食事の世話などをされていたのである。

営内居住の見習士官は、集会等するたびに、こうした女性達の噂話に花を咲かせていた。そして、誰々はミス福知山だ。誰々は準ミス福知山などと、勝手な議論をしていた。そのミス福知山が、見習士官の誰かと結婚したらしいが、内田隊長と会った時は、それが誰であるかは、分らなかった。

その頃、マッカーサーの指令に反撥していた全官公労働組合は、昭和二十二年二月一日を期してゼネストをやることを宣言し、社会は騒然となっていた。そして、その労組の事務局長はかつての見習士官仲間の大出俊君で、華々しくデビューしていた。

「あの大出君も、偉くなったな」

毎日の新聞を見ながら、それとなく大出君の活躍に注目していた。しかし、これもその年の一月三十一日のマッカーサーのゼネスト中止命令で、あっけなく幕を閉じた。

その後、幾年月か流れて、多分昭和三十年頃と思うが、何かの機会で大出君と会うことができ、新橋の飲み屋で大いに気炎をあげて、旧情を温めた。二人共、飲むと大声で卓を叩きながら、時勢を論じあったが、その内に女房論にまで発展して、大出君は、

「おまえな、どんな女と結婚したんだ。俺の女房はミス福知山だぞ」

といわれてビックリした。それではかつて、内田隊長がいつておられたのは、大出君であったのかと分ったわけに、二人で改めて乾杯して杯を傾けた。

その後、何回かの選挙に、桜木町の大出君の事務所にでかけ、陣中見舞をしたのであるが、夫人にも会うこと



——福知山会での大出氏（中央）と筆者（その左）——

ができて、懐しい思いに浸った。すでに二児の母として活躍しておられ、私も二人の子供を持っていた。大出君との交流は、こうした事で、福知山会や、その他の機会に何回か会った。彼が全通関係であったので、私の家に電話を引いた時など、大いに力をかしてくれたのも、こうした因縁のたまものであった。

ところが、年も経て、私が昭和五十六年の九月に築地のガンセンターに入院して、第一回目の胃の手術を受ける前々日、ぼったりと大出君とエレベーターの中で、出くわした。

「君は何しにきたのだ」

お互いにこんな所で会うのは珍しいので、ただしあった。私は、事の次第を述べ、大出君のことを聞いた所、

「女房がガンでな、明日にも危ないんだよ」

ということとで、びっくり仰天した。聞けば同じ十階の一筋違いの病室で、死に瀕しているというではないか。何ということか。そして彼は、夫人の葬式のことを相談す

る始末である。私はバラの花を早速、病室に届けさせた。大出君がお礼にきて、

「これは安居からだよと言ったら、分ったらしいよ」

と言ってくれたので、私もそれなりにうれしかった。大出君は、国会の質問戦に忙しいのに、毎日来ては看病していた。それは、はためにもいじらしい程であった。

私の手術も無事終り、毎朝の散歩には、それとなく大出夫人の病室をのぞいてみた。カーテンがかかって、中の様子は分らなかったが、まだ元気のように安心していった。所が、十月九日の朝、散歩にでてみると、大出君の夫人の病室は空であった。びっくりした私は、看護婦室に飛び込んで、

「大出さんは、亡くなったんですか」

と叫んだ。その叫びは余程大声であつたらしく、看護婦達是一同私を見た。そして、その事実を認めた。何故大出君は、その事を、一寸私に知らせてくれなかったのか。私は電話機に飛びつき、彼の家に電話した。彼は静

かに言った。

「すまん。昨夜八時過ぎに息を引きとった。君に知らせる為に病室に行ったが、もう九時の消燈時間が過ぎていた。何も病人に知らせることはない、しばらくドアの所に立っていたが、やめて帰ってきた。すまん、すまん」

なんと不思議な因縁であろうか。そして、これが宿世の縁というものであろうか。非情とはこの事であらうか、しかし、これが生者必滅・会者定離のみ仏の教えであらう。これを悟るのが、仏弟子たるものの私の努力でなければならぬ。

夫人の葬儀は横浜の宮林昭彦上人の大光院で行われた。私が紹介したのである。私は花を供えて、病院から、遙かにその冥福を祈った。

その後、大出君に会う毎に、この話をして、なぐさめ会っている。軍隊生活のエピソードが、こんな悲劇で終るとは、なんと悲しいことではないか。今更のように、仏のみ教えが、身にしみたことであつた。(つづく)

心の時代へ願う

北^{きた}山^{やま}良^{りょう}祐^{ゆう}

(焼津市光心寺住職)



一体、責任は誰にあるのであろうか。

“人の一生は重き荷を負うて、遠き道を行くが如し”とは徳川家康公の有名な家訓である。

徳川時代、人生のことを“人の一生”ということで言い表わしたようである。人生とは正しく“人の一生”ということである。人の一生とは、いうまでもなく「生れてから死ぬまで」のことである。だから、人生とは“生れてから死ぬまで”のことであると謂える。

“人身受け難し 今己に受く”

とは、仏教の人生観の出発点である。

天空高い所より、糸を垂して海中深い底にある針の穴に通すが如し。そのように、六ヶ敷しい。有ること難いことが、人生に生を得た事柄だと謂うのである。

然し、私共は正直云って、六ヶ敷しいも有ること難いも感じない。生れて来てしまったのであるということが実感であって、生れ難い人の世の中、更に仏教の示す“人身受け難

し”が、真底仲々理解できないのではないだろうか。体験できる世界の事柄は割合に領解し易いが、冷暖自知ではないが、その事自体、体験がないと仲々知り得ぬ世界がある。生れ難い人界と謂われても生れ難いその事を体験していない私共には、生れ難いその事に真底より理解し、体認することは六ヶ敷しい事柄であると思うのである。だが、このことは極めて大切なことである。(何れこの事に就ても述べてみたい。)

まあ、そうではあるが、とにも角にも、その生れ難い人の世に生れて来ている私共ではある。そうして、死ぬ瞬間まで、人界にあることは間違いのない事実である。

人生とは正しく、その生れてから死ぬまでの間のことである。

その人生に対して、その人生を、どのように生きるかということに対して、仏教は、お釈迦さまはお示し下さったのではないだろうか。生れてから死ぬまでの間のこと、即ち、

生きている人間Ⅱ人生Ⅱに対する教えこそが仏教であると思うのである。

それはたとえば、毒箭の矢の譬が示すように何はともあれ、生きているその事を、しっかりと踏まえねばならないのではないだろうか。“死んでから、どうなるか”と云う問いに対する答えは、生きている今Ⅱ現実Ⅱをこそ見つめることの大切なことを以て応ぜられたのではないだろうか。死んでからのことには答えられなかったのである。それにも拘らずお釈迦さまの教えⅡ仏教Ⅱが、何故、生きている間のことⅡ生より死までⅡ人生Ⅱに余り係わらないで、人間でなくなったことに、即ち、死んでからのことに明け暮れて了うようになっただけであらうか。もっと手っ取早く云うならば、葬式仏教になって了ったのであろうか。葬式仏教が異論(異端かも知れない)で不必要で一概に悪いというのではない。それはそれとして評価もされねばならないと思っているが(これに就ても何れの日にか述べたい)、

生より死までⅡ人生を問題とした仏教の本流とは、本来云えないではないのではないだろうか。と云うことを云いたいのである。

にも拘らず今の仏教Ⅱお寺さんと、そして、檀家さんもⅡ伽藍を中心とした仏教は――人間――生より死までの人生Ⅱを問わないで、人生を終った、即ち人間人生でなくなつたものに明け暮れるのであろうか。

卒直に云つて、現に行われている仏教は、人生を終った、即ち死んだその時点から、本来、問わない本質の仏教が、必要になつてくる。おかしい話である。おかしいことのためにお寺が役割をもつことになっている。いよいよおかしい話である。やがて人が死んでもお寺が必要でない時代が来るかも知れない。いや、今のままの随勢で進めば必要なくなるであらう。現に行い、且つ行われている葬祭・仏教の儀式が極めて空虚であるからである。一体、そうなつたのは、誰に責任があるのであろうか。

お寺さんⅡ僧侶にあることは申すまでもないが、それだけであらうか。そうではない。檀家に信徒にも、その責任がある。否、むしろ檀家の方にこそ、その責任の大きさがあつたと私は思っている。檀家がその所謂の如く、お寺を建てて檀那として、その分限としてお寺は建てながめ、建てっ放しなのである。即ち、建てたことの、否、建てることの本来的使命に欠けていることのためであると云えないのではないだろうか。だから、本堂建立の時、多くは、あっち見、こっち見して建立財を寄附しているのである。それが殆んど現実ではないだろうか。若し、真実の檀那として建立する意義を感じてのことであるならば、もっと清らかに、もっと自ら積極的に、どなた、こなたに関りなく寄進するであらう。そう云えば云い過ぎだろうか。

若し、そのようなことで建設されたとしたら、その本堂の役柄は、もっともって活きて来た筈である。

ぼつぼつ本当の事に目をやり、本当の事に徹していかなければ、僧侶としての人生を本当につまらなく終つて了うと云うことを痛感する頃になったので、痛感するままに卒直に申し述べたのである。

近づいた二十一世紀は正に「心の時代」と謂われる。

仏教が「人生」人間をこそ問うているのであるという原点に立つのであるならば、その二十一世紀に向かつて、道俗共に、もう一度厳しく、今の仏教を見返してみることが大切ではないだろうか。

葬式仏教も必要であるとしながらも、本来的仏教のカケラすら見ることの出来ない今の仏教を、それでよしとすることは許さるべくもない。

その責任が、どこにあるかが「過去の政策によって（政治的に）そうなったのだと云つても始まらぬ。現在を踏えて、仏教に関わる者一丸となつて活性に心ふりむけねばならない

重大な望に至っていることを痛く感ずるのである。

法然上人は

われ、たとえ死刑に処せらるゝとも、このことを云わずばあるべからずと申された。

第七祖聖岡上人は、随他扶宗の浄土宗を、宗戒兩脉の制定を以て宗徒の自覚を促し、五重相伝の念仏信仰確知の基礎を確立して、信者育成を目指された。

教義を超えて念仏実践に意を注がれたことは、宗門人の教化を思う時の何よりの指針である。

道俗共に、二十一世紀は「心の時代」それならば、「誰でも、何処でも、何時でも」できる念仏の信仰こそ、その負託に答え得る道と信じ、それにも拘らず、現況の余りにも、横道に外れていることの責任を、自分にあると反省し、勇猛精進を期したいものである。

「浄土句集」選者

一 田牛畝先生ご逝去

大本山善導寺（福岡県久留米市）第六十三世ご法主でおられた大僧正一田善寿台下が、さる三月三十日（日）午前一時三十分ご遷化されました。法寿は、宗祖法然上人と同じく八十歳ということで、いずれも釈尊仏陀の一化八十年のご生涯と同年であったわけです。還蓮社大僧正愚誓上人念阿牛畝善寿大和尚靈位のご冥福を謹しんでお祈り申し上げます。

『浄土』誌愛読者にとっては、一田善寿ご法主台下は、『浄土句集』コーナーの俳句の選者、ホトトギス同人一田牛畝宗匠として、この十年来愛着この上のないお方でした。昨年の本誌四月号より、ご体調の具合から、「浄土句集」コーナーの選句を休載されてほぼ一年、再び誌上に登場していただくことを願っていたのですが、まことに悲しいことながら、西方浄土へご遷化されてしまったのでした。改めて、「浄土句集」の句作者はもちろん、会員一同、哀心より、一田牛畝先生の安かなご冥福をお祈り申し上げます。

略歴 明治四十九年九月二十九日、

福岡県粕屋郡志免村に生まれる。大正八年出家、昭和六年大正大学卒業、同年福岡市正定寺住職（以後五十年間）、同十二年総本山知恩院布教師、同二十年福岡教区教区長（以後十三期三十八年間）、同四十一年浄土宗教教師会副会長、同四十六年浄土宗教教師会理事長、同五十七年大本山善導寺法主拝命。

また、台下は教誨師・俳人（俳号牛畝、昭和三十六年「ホトトギス」同人となる）としても著名で、受刑者を俳句の指導などで更生に尽くし、「死刑囚の父」とも呼ばれていた。これらにより四十七年法務大臣表彰、五十一年藍綬褒章、六十年勲五等瑞宝章を受け、俳句で五十二年福岡市文学賞を受けている。

著書に『句心仏心―十人の死刑囚』『句集―花爪』など多数。

（『浄土宗新聞』二二二一号より）

◎『浄土』表紙版画絵販売についてのご案内

『浄土』五月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実と継続のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、本年の正月号より、松浦春子先生の清楚な作品を頂戴しております。今回も、松浦先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただきます。額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えれば幸いです。

また、大きさの方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度の小林治郎先生の版画絵も、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えれば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―二―一六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八―八二二八七

河西回廊の秋

「五大石窟の旅」旅日記（十）

—蘭州—



木きの下した隆りゅう一いち

（随筆家）

あなた任せの旅というのは、スケジュールや乗り物などに余計な気を遣わずに済む利点はあるが、地理に全く不案内になる欠点も併せ持っている。北京や上海、西安といった大都市の地図は日本でも手に入るが、蘭州や洛陽となると、地図を探す術すべがない。地元の町の本屋にでも行けば売っているのであろうが、その本屋を探すのに一苦労も二苦労もしなければならぬ。結局はマイクロバスに乗せられて、お仕着せのコースを辿るといふことになる。私は初めは蘭州駅から、二度目は蘭州空港から宿舎の金城賓館に入ったが、その金城賓館が蘭州市のどの辺に位置しているのか、いまだに判らないでいる。中国国際旅行社蘭州分社が編集した「蘭州」という日本人向けのパンフレットには、観光案内図が載っているが、友誼賓館や蘭州賓館は出ていても、最も新しい、それも目下建築中のホテルとあってか、金城賓館の名は記載されていなかった。

九月九日、日曜日である。どんよりと雲が垂れこめていて、地上がかなり濡れている所を見ると、また夜中に一雨あったようである。

「ええお湿りと言ったところですか」

少々風邪気味の藤原さんには、成程いいお湿りである。

「王さん、あの娘も風邪ひいたみたいだったが、ゆうべは家に帰ったのかな？」

蘭州が故郷のガイドの王さん、今日一日は特別休暇である。団長の佐藤博士のご配慮であったかと思う。

「お袋さんの手料理を食べれば、風邪なんか一遍に吹っ飛んじゃいますよ」

「そうかも知れん。それにしても、若い娘がよくやるねえ。何でも我々を上海から送り出した後、一日だけ休みで、翌日は北京へ飛んで、今度は二十何人かの日本人のツアーに付いて、ウルムチまで行くとか言っていた」

「このツアーのように、物分りのいい人ばかりが揃っているとは限りませんからね」

「ほんと、ほんと」

毎日一つ部屋に寝起きしていながら、随分久し振りに話をしたような気になったのは、話題が藤原さんの専門である木材や寺社建築に関するものでなくて、極く日常的なものだったからかも知れない。

パンフレットによれば、甘肅省の省都蘭州の市街区の面積は二千余平方キロメートル、人口約百万（註 周辺部を合わせると約二百万とも）。中国西北部第二の都市で、沿海地区から新疆・チベットなどの奥地に通ずる陸運・空輸の中枢であり、解放前は人口八万程の単なる消費都市に過ぎなかったが、いまでは新興の工業都市に変貌したと記されている。工業の中心は石油化学コンビナートである。近く

に油田が開発されたのと、劉家峽ダムが生み出す電力が、工業都市として飛躍的な発展を遂げさせたのであろう。

この日最初の観光は、黄河の左岸にある白塔山公園であった。山頂に明の時代に建立された白い仏塔と寺院があるので、いつの頃からか白塔山と呼ばれるようになったと言う。山腹を削って三層の台が造られ、それぞれの台には朱や緑に塗られた亭や高樓が建ち並び、いまでは山全体が公園として機能している。軒の端々が極端に反り上った構造の建物が、いつ建てられたのか私には判らないが、甘



——果壳箱（ゴミ箱）と痰壺——

肅の省都を
象徵する建
物と言って
いいだろう。
時折、霧
雨が頬をか
すめるが、
傘をさす程
の降りでは
ないので助
かる。数十
段の煉瓦を
敷きつめた
階段を登る

と、眼下に百メートル程の河幅を持つ黄河の濁流と、それに架かる黄河鉄橋が望め、対岸には旧市街の建物が上流の工業地帯から流れてくるスモッグに煙っている。この街で公害が云々されるようになるのは、もう少し先の事になるのであろうか。黄河の左岸、つまりすぐ眼の下に、小舎掛をして市が立っている。大半は青果物を売る店だが、肉屋も食堂も雜貨屋も軒を連ねている。射的屋に群がっているのはティーン・エイジャーの少年たち。銃は空氣銃らしいが、とてつもなく大きい音がする。清真食堂の看板を掲げているのは、少数民族回族専用の食堂であるが、豚を忌み嫌うイスラム教徒の回族のために、わざわざ牛肉を使用していると断り書したビラが硝子戸に貼りつけてあるのが面白い。白いお腕帽を被った男性が目立つ。これが回族の証なのであるが、女性は同じような衣裳を纏っている。特に回族の女性を識別することは出来なかった。

二の台の広場では、長剣を振るって思い思いに大勢の人が舞っていた。老若男女、みんな実に優雅な身のこなしである、京劇の殺陣の振り付けに似ていると言えば一番当たっているだろうか。鴻門の会の剣の舞——特別に詠えたと思われる美々しい剣をかざす青年の姿に、ふと私はそんなことを思った。地元のガイドの勧めで、ご婦人方の何人かが剣の舞に挑戦したが、なかなか、バランスがとれない。忽ち周囲は黒山の人だかりである。小柄な高齢のY夫人がとりわけ観衆の喝采を浴びたが、Y夫人の剣の舞は一分ともたなかった。「ああ重たかった。……どうも有難う。謝々」と、彼女が持ち主に剣を返すと、一斉に拍手が起こった。ちなみに、男性でこの剣の舞に挑戦した人は一人もいなかった。女性の方が万事積極的なのである。三の台から上は木立の中を縫った小径が続く。樹木の殆どは人の手で植えられたもので、その種類もまたいろいろある。植林はいまも続けられており、山の東側の谷間では両側から山腹に向けて、巨大なスプリンクラーで撒水していた。一日にどの位の水を消費しているのか想像もつかないが、撒き続けなければ緑を維持する事が出来ないであろう。三の台

から右手（東）に径を伝って行くと、食堂や売店のある一画に出るが、そこへ行く階段の途中で小石を踏んで、右足首を捻ってしまった。足首の方は大した事はなかったが、一瞬膝に走った痛みが氣になつて、それ以上登るのを断念する。この先、道中はまだ長いのである。頂上の白塔はともかく、せめて東風亭という、朱塗りの三本柱に支えられた三面の屋根を持つ、珍しい構造の建物だけはこの目で確かめておきたいと思つたが、遙か下から仰ぎ見るだけで我慢する。

午後は市内見物。バスも、東京では見かけなくなったトロリーバスも超満員である。日曜日の午後という事もあるが、町筋には人が葬んでいる。古い商家が立ち並び、百貨店があつたりするから、蘭州一番の繁華街なのであろうが、いかんせん道幅が狭く、その中を我々を乗せたマイクロバスは突き進み、着いたのは甘肅省博物館であつた。この博物館は甘肅省から出土した文物を主に展示するため、一九五八年に建てられた。陳列面積が千八百平方メートルもある堂々たる建物で、前庭には立葵、コスモス、カンナ等の花々が咲き盛り、遊歩道の処々に蛙や獅子を形どつた陶製の果売箱が大口を開けて、ゴミが投げ込まれるのを待っている。果売箱の横に必ずといっていい程痰壺が置かれているのは、唾を吐く習性のある中国人への対策であらう。いかにも中国らしい光景である。

展示物は石器時代から明代まで、長期に渡って黄河が育んだ文明の証言者のように並んでいるが、何と言つても白眉は、武威県の雷台から出土した前漢時代の軍馬俑・武士俑・輜車（物見車）の一団と、「馬踏飛燕」の銅奔馬像であらう。どちらも写真等でしばしば目にしていたので、実物が見られるのは有難かつたが、意外に小さいのに驚いた。銅奔馬像は高さ三十五センチメートル、長さ四十センチメートルの小さなブロンズ像なのである。軍馬俑もこの馬と大同小異で、口の開き方、胴の張り具合などから見て、同じ型から鋳られたような氣がしてならなかつた。もっとも耳の付き方、脚の動きの微妙な違いで、ヴァリエーションをつけてはあつたが……。新石器時代の渦卷文様の彩陶瓮など、

斬新な土器の文様には目を見張るものがあつたが、ここでの収穫は、木彫の犬の像を見つけた事であつた。掌の上に乗る程の小さいものであるが、立耳巻尾の秋田犬そっくりの姿で、渋谷のハチ公が締めている胸ベルトに似たベルトを付けていた。この合理的且つ現代的なベルトには感心したが、秋田犬のルーツを、この木彫像に見たように私は思った。

夕飯は金城賓館の近くにある、南昌路小吃部という食堂で摂る。店先で焼いている餃子の匂いが食欲をそそるが、我々のお目当ては手打ちラーメンであつた。

店の奥の広い調理場で、一塊りの生地を両手で引き伸ばして、麵を作っているのがガラス越しに見える。日本のラーメン屋でも、最近はこの種の店が増え、店頭でオーバーな身振りでショーアップしているのが、ご存じの方も多いと思うが、何故あんなに切れもせず段々細くなって行くのか、常々私は不思議でならなかつた。何か秘密があるはずである。しかし、私の長年の疑問も、この店であつさり解けてしまった。言ってみればコロンブスの卵で、生地に驚く程多量の食用油を混ぜるのである。「誰かやってみないか」と誘われてG君が応じたが、麵の形にすらならなかつたのはご愛嬌であつた。

油の入れすぎか茹ですぎか、いわゆる腰がなくて麵自体はそれ程うまくなかつたが、独特の匂いを持つ薬味の香菜が気に入って、私は二度もお代りしてしまつた。帰国後、デパートの中国野菜売り場で香菜を見つけ、早速うどんを試してみたが、香菜の匂いだけが鼻について、食べたものではなかつた。香菜はラーメンに限るようである。

二十三分七分、蘭州駅より麦積山に向け、天水行の汽車に乗る。

(続く)

も則天武后は男性権力にのみ依存して、のしあがってきたのではなかった。

抜群の頭悩とふてぶてしい決断力。加えて則天武后には規模宏大な権力構想が早い時点からその豊満な胸の奥で醸成されていたと思われるのである。依存したのはむしろ夫の高宗であって、父太宗の死後、揺れうごいた唐宮廷で高宗自身の足もとを誰か強力なパートナーによって支えてもらわねばならなかったのである。女色に溺れきっておれるほど高宗は剛毅な男ではなかった。専制君主の資質にも欠けていた。

つまり則天武后は高宗という「虚名」を足場にして、女性パワーがどこまで飛躍できるか、強大なものになれるかを人間史上で実験してくれた珍しい女性であった。

武照が後宮のランクで、才人から昭儀へ昇格したこの時点、高宗の女閹図を太閤秀吉のそれにあてはめてみると、王皇后は子宝に恵まれない北政所のおネネさん、蕭淑妃は淀君

だ。もちろん武照にあてはまる女性は太閤身辺にはいなかった。

蕭淑妃はその淀君を連想させる。立場や運命が、ではない。高貴の育ちで、ブライドがつよく、妖艶な美人だったらしい。ただし、おしゃべりで嫉妬深く、勝気で意地悪だったと中国近代のエッセイスト林語堂は評している。淀君の人柄は北政所への対応や大阪落城時の動きから判断するしかないが、蕭淑妃と相似した弱点が多いようである。

武照は、王皇后との緊密な連繫のもと、蕭淑妃のその弱点をついた。例によって後宮内における口コミを有効に活用した。平生から蕭淑妃のわがままさを嫌っていた侍婢や宦官たちは、あることないことを口にして、こきおろしにかかった。

そうした中傷は甥の郭憚良によって武照の耳へ取次がれた。しかし武照はじかに高宗へ告げ口をする愚はおかさなかった。

「品位の低い話題をしゃべったりしてはいけ

ない。しゃべった人間も相手と同列にみられてしまうのですよ」

と甥をさとすのであった。彼女なりの宮廷教育をやっているつもりなのであろう。

「でも淑妃が亀茲の商人からひそかに毒薬を買いこんだという話はほんとうらしいですよ」

少年憚良も近ごろではいっぱしの情報家になっている。

亀茲は沙漠の彼方の国で、西域との接点であった。その商人は現在のイランやシリアから高価な化粧品を仕入れて唐の後宮へ持ちこんでくる。毒薬まがいの品もたしかにあった。侍婢たちは、蕭淑妃がひそかにそれを買った。武照の化粧品へ混ぜこもうと企んでいる、と憚良の耳もとでささやくのである。

「かりにほんとうだとしても絶対に妾たちはそんな話を口にしてはなりません」

「わかりました。以後は二度と申しません」

少年は素直で、また大人の口裏を探ぐろうなどとする意図は微塵もない。

「そんな企らみはね、じきに暴露するものよ。ほれ、あれらが伝えてくれる」

と、武照は石壁の裾を指さした。

ネズミが一匹、つくねんとかがんでいた。

恐れげもなく二人の会話に聞き入っているみたいである。

「ネズミが言葉をしゃべるんですか」

「しゃべるとも。人間なぞよりもっと巧みにね」

当時の長安城にはおびただしい数のネズミが棲息していた。後宮の妃たちはみんな自室で猫を飼う慣らわしだった。猫自体が西域からの輸入品で、新らしぶりもあったにちがいない。武照だけが飼おうとはしなかった。ぶ気味で我慢がならなかったからだということだ。ために武照の寝室ではネズミが横行していた。そちらの方はいっこう気にならない武照であった。

ネズミがしゃべるとは、どういうことなの
であろむか。惲良には叔母の言葉が不思議に
思えてならない。

数日が過ぎたある午後である。蕭淑妃の寝
室で騒ぎが持ちあがった。化粧台の下から子
猫ほどもある巨きなネズミの死体が侍婢によ
って発見された。

侍婢はすぐに武照のもとへ報告にきた。そ
の日、蕭淑妃は朝から外出しており、寝室は
無人だった。

「王后さまにしらせて来なさい」

武照は冷静に命じた。後宮の監督責任者は
王皇后である。

すぐに駆けつけた王皇后に武照はネズミの
赤黒く変色した腹を示しながら言った。

「毒をのんだ様子です」

「毒を？ そんなものがどこにあったのでし
よう」

「ひょっとすると……」

武照の視線は化粧台を舐めまわしている。

数箇ならんだ西域製の壺を、王皇后は一つづ
つ取り上げ、なか味の溶液を掌心に少量落し
ながら点検しはじめた。その一滴から強い異
臭がただよった。かたわらにあった手拭き紙
でぬぐってみると、たちまちどす黒く変色し
た。

塗りこんでどす黒くなるような溶液が化粧
品であるはずがなかった。

「毒だわ」

王皇后は色を失った。

「ネズミにのませてみましょうか」

武照はあくまで冷静だった。自室にいるネ
ズミ一匹、惲良少年にとらえて来させた。

ただちに溶液をネズミの口へふくませた。吐
き敷らしながら悶え苦しんだ。寝室の隅、壁
下の隙間へ逃げこもうとしたが、そこまで到
達できずネズミは赤黒く変色した腹をさらけ
て悶死した。

「淑妃はこの毒を何に用いるつもりだったの
でしょう」

王皇后は勝ち誇った笑みをうかべながら訊いてきた。

「さあ、そんなことは誰にもわかりませんわ」

「きつとわたしや貴女を殺す気なのよ」

「王后さま、根拠もなくて忌まわしいことをおっしゃってはなりませんぬ」

なだめにかかる武照だった。だが王皇后の昂奮は激しくなるばかりである。

「きつとそうだわ。もしかすると天子さまのお命さえねらっていたかもしれない。あの牝鶏ならやりかねません」

「王后さま、お言葉をお慎しみ下さい」

「このことは一刻も早く天子さまのお耳に入ればなりません。あなた、それらを籠に入れて一緒に来て下さい」

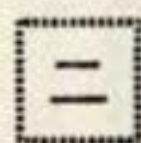
と憚良に命じた。憚良は毒薬の壺とネズミの死骸を籠におさめた。王皇后のあとをついて出てゆこうとすると、武照はそんな甥を呼び止めた。王皇后の耳へ届かないようにささ

やいた。

「帝に何を訊かれても、あなたはいつさいこれですよ」

と唇の前に指を立てた。

少年の智恵でも叔母の深慮遠謀が理解できた。この不吉な事件へのかかわり合いをかたくなに避けようとするのである。



化粧水に混じった毒薬の件について、王皇后から報告を受けた高宗は、じかに蕭淑妃を訊問した。勝気で我がまま、かつて苦労らしい経験のない彼女は激しく言いかえしてき

た。「天子さまとの間に皇子や皇女を生んだ妾が、なぜそんな詰まらないことを企てたか、はならないのでしよう。現在のままで充分に満ち足りていますわ。妾が、王皇后や武昭

儀を毒殺するんですって！ 王皇后は生まず女でいらっしゃる。妾にはあの方を取り除く理由など全くございません。また武昭儀……あんな女は初めから問題にしていませぬわ。天子さま、あなたのお父上のおさがりではありませんか」

「しかし現にお前の化粧台から毒薬が発見されている」

高宗は若いころから病身がちで、気も弱い男だった。激しく言いかえされると、たじたじとなってしまう。

「あの女が仕掛けた罠にきまっていますわ。だいたいこの毒薬は西の国のものではございませぬ。蜀の国には昔から毒をふくんだ石がある」と聞いております。亀茲の商人をお調べになると、すぐに判明すると思えますわ。彼らがそんな品を入手できるかどうか。武昭儀は蜀の国で育っています。あちらからなら容易に……」

毒をふくんだ鉱石を入手できるはずだ、と

主張する。蜀の国とは四川省のことで、そこ
の奥山で硫黄石が採取できるのも嘘ではなかつた。

「よろしい。そちらを調べてみよう」

高宗はそれ以上の追究はできなかった。

亀茲の商人たちを調べたが、蕭淑妃の言う
とおりの西域にそんな毒薬はなかった。ただし蜀の国の毒物も事実無根だった。毒性をふくんだ鉱石を液化するなぞ考えられないことだからである。

結局、この告発はみのらなかった。だが、
むじつが晴れたとは言え高宗の蕭淑妃への愛情は薄められてしまった。毒物所持の疑惑もだが、それ以上に抗弁した折、正点をむき出して悪口を叩きまくった彼女に嫌悪感を強くしたのである。

高宗は蕭淑妃の寝室へ足を向けなくなつた。武照としてはそれだけで充分だった。もともとイメージダウンだけをねらった策謀だったのかもしれない。だからこそ武照は彼女

自身この事件で表面に立とうとはしなかった
のであろう。

女が昂奮して言いつのるとき、悪印象だけ
しか残さない事実を武照はよく心得ていた。
その意味で告発者を買って出た王皇后も悪い
印象を高宗に与えてしまったようである。

ところで、その前後の武照は二度目の胤を
宿していた。月満ちて生まれたのは女兒であ
った。

「こんどは女の子でした」

いまや離れがたい同志となった王皇后が見
舞いに現れると、武照は産褥から弱々しく微
笑みかけた。

「すでに男の子は生んでいるんですもの。天
子さまも可愛らしい女の子で、いつそようお悦
びですよ」

無心に赤ん坊をあやすのであった。
まさに無心に、であった。王皇后はよほど
この女兒が気に入ったとみえ毎日のように揺
り籠を訪れた。

武照が起き出して間もないある日だった。
高宗の部屋に現れた武照はしばらく雑談し
ていたが、

「あの子もだいぶ可愛くなりました。一度、
抱いてやって下さいませんか」

と甘えて言った。

「王后もそのようなことを申しておったな」
気軽く応じて武照の寝室へいった。

女兒を抱きあげた高宗は俄かに表情を曇ら
せた。

「おかしいぞ、この児」

「どうかしましたか」

「冷めたくなっている」

「えっ……」

武照はあわてて女兒を抱き取った。すでに
冷めなくなっていた。

ただちに留守居をしていた侍女が呼ばれ
た。

「お前はずっとこの部屋にいたんでしょう」

「はい……でもちょっと前、少しだけ部屋を

消してしまふなんて……」

武照は高宗の腕に取りすがって再び新たな涙にむせんだ。

「もはや王后たる資格はない」

優柔不断の高宗も死児を眼前に見せつけられては、こう言い切らないではおれなかった。

だがいざ実行となると、容易に手を付けることは出来ない。王皇后の背景には、高宗の伯父にあたる長孫無忌を頂点とした血族集団があった。彼らの支援で高宗は帝位を継げたようなものである。

それと、王皇后の乳児殺しにも確証はなかった。侍女の証言だけでは弱いのである。無忌系の官僚のなかには、乳児を殺したのはその実母、武昭儀だと疑ぐる者さえあった。後年における則天武后の行状から推断すれば、この疑惑のほうが的中だったと言えるかもしれない。

いずれにしても王皇后の処分が未執行のさ

なかである。高宗が病みついた。胸部を原因不明の激痛が日夜おそったのである。医師を招いて治療にあたれたが、効験がない。武照はどこかから若い道士を連れてきた。

「未だ年はお若いのですが、神応ぶりはいま何でも評判のお方なのですよ。天子さまのお胸から一刻も早く魔性を取り除いてもらいましょう」

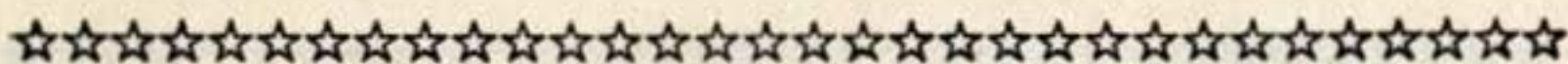
道士は寝台に仰臥した高宗の身邊で次々とさまざまな呪術祈禱をやってみせた。香を焚き、焼けた小石を高宗の胸や腹に押しあてたり、部屋の四隅に聖水を打ったりした。

やがて高宗に起きあがることを命じた。これまで背中を密着させていた敷布の辺りを柏の小枝で撫でまわしはじめた。

「ここに魔性が巢喰っているはずですよ」

しかし、いくら探ぐっても何も出ては来なかった。

「おかしい。たしかこの辺りで魔音が響いているのだが……待てよ。もしかすると寝台の



酒
刑



らであった。

もはや疑ぐる余地はない。

この一事で従来の疑わしい行為がすべて
「真相」となって暴露された。

王皇后は獄へ投ぜられた。おかしいのはこれまで軟禁程度だった蕭淑妃までが同じ罪名のもと、投獄されたことである。つまり一連の凶悪犯罪はすべて兩人が共謀して実行に移された、と断定されたのである。

刑は「杖刑」と「酒刑」であった。

全裸にむかれた王皇后と蕭淑妃は獄吏によつて百回の杖刑を受けた。全身は赤くただれ、妍をきそつたやわ肌もいまや見る影もなくなった。

「酒刑」とは満々と酒をたたえた樽の中に罪人を漬ける刑である。初唐のころ、その酒は吐蕃国（チベット）から運びこまれる濁り酒が用いられたと言われる。米から醸造した「どぶろく」である。

「杖刑」で血だらけになった肉体を、醗酵

中の「どぶろく」に沈める。当然、酒精分は再醗酵する。強烈な熱度で肌を焼く。さらに醗酵時の臭気も呼吸器管を衝撃し、殆どどの罪人が阿鼻叫喚のなかで悶死してしまうのが常であった。

王皇后は百度の「杖刑」で死に近い状態になっていた。ぐったりした肉体を酒樽へ投げこまれただけで刑はおわった。

気丈な蕭淑妃はそうはいかなかった。透きとおるようなやわ肌を朱に染めて、全身に鞭の跡を残しながら酒樽の脇に立った。

「ひと目会いたい人間がいる」

と獄吏に要求した。

「誰に会いたいのか」

「武昭儀を呼びなさい」

「口を慎しめ。もはや昭儀ではないぞ。あの方は王后になられたのだ」

獄吏の言葉に嘘はなかった。二人の刑が確定した途端に武昭は念願の王后位を掌中にしていたのである。もはや長孫無忌らも反対す

る理由はなかった。すでに生んだ皇子李弘は皇太子になっており、その生母が王后になるのは当然であった。

「そう、王后さまですか。よろしい。その王后さまにひと目だけお会いしましょう」

蕭淑妃はぶ気味な笑みをうかべて再度要求した。

「王后さまが何とおっしゃられるか……うかがうだけは」

と獄吏は去った。

この要求を聞いた武照——いや、これからはこの文章でも則天武后と呼ばなければならぬ。武后は全く無表情で答えた。

「会いましょう」

ゆったりとした足どりで、石窟の獄室の方へ歩いていった。

則天武后が現れると、気力だけで立っていた蕭淑妃は足もとを踏め固めるつもりか、それともいっそう淫卑な姿を見せつけるつもりだったか、血だらけの股をひろげ則天武后を

睨らみつけた。

「とうとう妾の前へ現れたね、この淫売女め」

「……」

「妾はもうすぐ死ぬだろう。でもこの眼だけは見おぼえておいで。これからいつでもお前の前に現れて睨みつけてやるから」

「死んだ人間が、どうやって現れるというの」「猫だよ。猫という猫の眼のなかに妾は宿っているんだよ。そうしていつかどこかでお前の咽喉を喰い切ってやる」

「言いたいのはそれだけなの」

則天武后はまだまだき一つ打たないで狂乱の蕭淑妃を凝視しつづける。

「悪魔、これ以上、何を言えと……」

「あなたの言い分がそれだけなら、妾もひとこと言っただけ聞かせます。そんな眼はじきにとろりとだらしないものになってしまふ。なぜならこれからたっぷり異国の酒に漬かって酔いしれてしまふんだから」

「誰が酔ったりするものか」

「いいえ、天子さまがいつもおっしゃってたわ。あなたはいつもひとり勝手に酔いつぶれて、あらぬことを口走って、かたわらにだいいな天子さまがいらっしゃることさえ忘れてしまふんですってね」

則天武后は閨房にいるときの蕭淑妃の痴態を唾うのだった。

「……」

もっと何か罵りの言葉を、とあせったが、唇がわなくなばかりで語句は洩れて出なかった。

「もういいでしょう。その人にたつぷりお酒を飲ませておやり」

則天武后は静かに獄吏たちに命じた。手足をばたつかせて抵抗する蕭淑妃はそのまま酒樽の底へ投げこまれた。気力だけで生きていたのであろう。白濁した酒の底へ沈んだ蕭淑妃の顔は再び浮上してはこなかった。

ライバルの二人を消し去った。王后位を掌

中にする確約も得た。則天武后における女の戦いはこれで完勝に終わったはずだった。だが、そうはいかなかった。

「惲良や。一寸頼みがあるんだよ」

甥を招いて、ささやく則天武后だった。

「何でしようか」

「伯母さまの様子に注意して欲しいのよ」

「伯母さまですって……」

「賀蘭の伯母さまです」

「どんな様子に注意をするのですか」

「天子さまが伯母さまのお部屋に通っていらっしゃるみたいだけど……」

武后の姉だった。いったん嫁いだが、夫に死別、一人娘を連れて生母のもとへ戻った韓国夫人である。

武后の後宮入りの折、母ともども宮殿の近くに居を構えたが、どうも近ごろ高宗はその韓国夫人のもとへ忍んでゆくらしい。

少年には荷の重すぎる仕事ではなからうか。
(つづく)

◎読者の皆様へお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

- 一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）とめ下さい。
- 一、枚数 四百字用紙五〜八枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十二巻 五月号

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和六十一年四月二十五日 印刷
昭和六十一年五月一日 発行

編集人 宮林昭彦
発行人 佐藤密雄
印刷所 長谷川印刷

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒二〇三 振替東京八一八二一八七番

第五十二卷

五月号

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和六十一年四月二十五日印刷 昭和六十一年五月一日発行